ミクロ少女

AKiRA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミクロ少女

【Ｎコード】
Ｎ６８９５Ｊ

【作者名】
ＡＫｉＲＡ

【あらすじ】
身長１７０ｃｍの極普通（？）の中学一年生、鉢根（はつねみく）美紅。
勉強に部活に恋に、まさに青春（？）を謳歌する美紅にも、一つだけコンプレックスがある。それは言うまでもなく、身長のこと。
ある夜、小さな、可愛い女の子になりたいと流れ星に願った。
翌朝、起きた彼女は身長５ｃｍまで縮んでいた。

１７０ｃｍと１４０ｃｍ

六月のある日、一人の少女にとんでもないことがおこった。
月日はもどって四月。
「いってきまーす！」
住宅地の、ある一軒家から一人の少女が元気よく出て行った。
その少女は、名前を『美紅』といった。
一見して普通の中学１年生の美紅。
顔もこれと言って可愛いと言う訳ではないが、不細工というわけでもない。
運動神経はいいほうだ。
勉強もそこそこできる。
同じ部活の先輩に恋もしている。
だが、そんな美紅にもひとつだけ、コンプレックスがあった。
それは、身長が他の中学生に比べて高いことだ。
小学校六年生の冬にはかったときは一六六センチメートルだったから、今は少なくとも一七〇センチメートル近くはあるだろう。
廊下を歩いていても、体育館で並んでいるときも、ひときわめだってしまう。
小学校五年生くらいのときはいつも周りと比べていたが、今はそんなに気にしないようにしている。
そんなに身長のことを気にせずに早くも一ヶ月が過ぎようとしていた、五月のある日。
いつものように先生が教室に入ってきた。
「おーら。席に着けー。Ｈ．Ｒ始めるぞー。」
ブーイングの嵐が先生を襲う。
ここまでは、いつもの朝の光景。
いつもと違うのは、先生のこの一言だった。
「みんな。今日は転校生を紹介するぞー。因に女の子だー」

たったの今までブーイングが飛び交っていたことも忘れて、全員（特に男子）から歓声が上がる。
「よし。入れ。」
入って来たのは、とても小さい少女だった。身長は、約一四〇センチメートルぐらいだろうか。
フランスか、それともどこか別の国のお人形のように、可愛かった。
（かっわいいなぁ）
美紅は、ふとこう思った。
（先輩は、あの子みたいな、ちっちゃい子が好きなのかな？）
普段は考えないようにしていたことを考えてしまった。
そんなネガティブな考えを急いでかき消す。
そして、空っぽになった頭の中で、
（仲良くなれるといいな）
そう考えることにした。

少女が転校して来て、数日が経った頃。
休み時間に一人で読書をしていた美紅に、少女が話しかけて来た。
「何、読んでるの？？」
だが、名前を覚えるのが苦手な美紅には少女の名前が出てこない。
「えっ、え～っと・・・」
少女は美紅が自分の名前が分からなくて戸惑っていることを悟った。
「あっ、私の名前ね。要　來未っていうの。來未ってよんでね。あなたは鉢根美紅さんよね？」
「うん。美紅ってよんで。」
それから二人は、好きな本についてとか、部活について話したりした。
翌日には一緒に登校するまでになり、その翌日には、凸凹コンビとして学校中に知られた。
美紅は文芸部、來未は吹奏楽部として、それなりに楽しい日々を送っていた。

気がつけばもう六月。

部活の終わった放課後。
來未が突然、美紅に聞いた。
「みーちゃんはさ、好きな人とかいるの？」
「えっ・・・？」
「ねぇ。いるんだったら教えてよう。」
美紅は正直、こういう話は苦手だったが、來未に隠し事はしたくなかったから、言うことにした。
「くーちゃん。誰にも秘密だよ。わたしね、文芸部の・・・樫矢先輩が好きなんだ。」
「うそ！ほんと！？」
「ホントだって。」
「まぢで！応援する！」
「ありがとう」

そして、その数日後。
美紅は見てしまった。
來未と樫矢先輩が、手をつないで一緒に歩いているところを。

その夜、美紅は泣きながら星に願った。
「小さくて、可愛い女の子になれますように。」
何度も、何度も願った。

美紅とみるく

翌朝、起きた美紅は変な感じがした。
目を開けると、掛け布団がものすごく大きく見えた。今何時だろう？ふと、そんなことを思いいつも枕元に置いてある目覚まし時計を確認する。
しかし、何度も目をこすってみても、瞬きをしてみても、自分より目覚まし時計の方が大きく見える。
（寝ぼけてるのかな？）
とりあえずベッドから降りようと思い、ベッドの端まで行こうとしたが、なかなかつかない。
なんとかつくことができ、さあ降りようと下をむくと・・・。
「高！」
床がものすごく遠くに見えた。
そう。
美紅の身長は、約五センチメートルまで縮んでいたのだ！
「ど・・・どうしよう。とりあえずベッドから降りなくちゃ。」
だが、どう考えても飛び降りれる距離ではない。
何をする訳でもなくただおろおろしていると・・・
「にゃーん。」
美紅の飼い猫、みるくが真っ白い美しい尾を優雅にふりながら入って来た。
「みるく！みるく！みるく！」
すると、みるくはうるさいなぁと言いたげな顔で、言った。
「うるさいにゃぁ。」
「ふ・・・ふえっ？」
「だぁかぁらぁ。うるさいっつってんの！」
「は、はぁ。」
「何？ネコがしゃべんのがへんか？もう。これだから人間は。」

「いえ。」
「じゃぁなんだ？なにがおかしい。」
「みるくって、雌ネコだよね・・・？」
「ああ。」
「私は学んだ。『外見にだまされてはいけない。』ことを・・・」
「はぁ？何言ってんだかわかんにゃいけど、とりあえず乗れや。リビングまでつれてってやる。」
「あ・・・ありがと。」
美紅は、とりあえず乗せてもらうことにした。
ぴょん
みるくは、美紅が乗ったのを確認すると、
「振り落とされんなよ。」
ひと言だけ言い、全速力で走り出した。
「ふ、ふにゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
よく分からない悲鳴を残し、美紅は気絶した。

気がつくと、美紅はソファの上のみるくの上にいた。
時計を見ると、午前9時。
妹の華湖は小学校。お母さんは仕事に行ってる時間だ。
「小・・・学校？」
そこで美紅はある重大なことに気がついた。
「学校どうするのぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」
「うるさいにゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」
叫ぶ美紅をみるくが一撃で黙らせる。
「だいたい、学校学校って、そんにゃに学校が楽しいにょか？」
「・・・」
「・・・」
しばらくの沈黙。
その沈黙を、みるくが破った。

「そういえば、美紅はどうしてそんにゃにゃに小ちゃくにゃったの？」
「・・・なんでだろ？」
美紅は昨日の出来事を一から思い出してみる事にした。
「たしか・・・、学校行って、帰って来て・・・」
「・・・」
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」
「どうしたにゃ？」
「昨日、夕ご飯食べてない・・・。」
ぐるるるる
美紅のおなかが鳴る。
と同時に、みるくが美紅を振り落とす。
「っまえぇ！そうゆーことを聞いてる訳じゃないのぉぉぉ！！！」
「ふぇぇぇ！す、すいませんでしたぁぁぁぁ！！！」
「ったく。これだから人間は。で、思い出した？」
「あぁ、うん。帰って来て、流れ星にお願いして・・・それから・・・」
美紅が「寝た」と言い終える前に、みるくが言った。
「それにゃぁぁぁぁぁぁ！！！」

小さいって、すっごく不便だと思うんだ。（前書き）

ようやく第三話です。
お待たせしました。

小さいって、すっごく不便だと思うんだ。

「ねぇ、みるく。元に戻る方法は分かったんだけどさ・・・」
今から数十分ほど前、流れ星にお願いしたことが第一因だと知ったみるくは、要領の悪い美紅になんとか分からせようと、必死に説明した。
「つまりは、あんたが星に願いをかけたコトで、こんなにちみい姿になっちゃったの！と、いうことは、また流れ星に願えば直るっつーワケさ！」
そんなみるくの必死の説明が届いたのか知らないが、ようやく美紅にも理解することが出来た。
で、現在の状況に至る。
「何にゃ？」
美紅の自信の無さげな「わかった」にみるくは怪訝な顔をする。
そんなみるくが眼中に入っていないのか、美紅は空気を無視した言葉を極真面目な顔で言う。
「ねぇ、おなかすかない？」
とたんに、また美紅のお腹が変な音をたてる。
ぐるるるる
　　プツン
一瞬、何かが切れるような、そんな音がしたかと思うと
「こんの・・・・・KYめがあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
という絶叫と共にみるくの説教が始まる。
「あんた今そんなことどうでもいいだろ！まず元に戻るのが最優先だろ！それからハンバーグでも焼き肉でもステーキでも食えばいいだろ！だいたいキャットフードなんてまずいもの・・・・・。自分たちはスゲーいいもん食ってんのにさ！これだから人間は！！！」
「・・・・・」
「・・・・・」

みるくはこんなに捲し立てたのに、美紅が言い返さないのに少し驚きつつも、息を整え始め、美紅はというとお腹がすいてそれどころではなく、また、言い返す気力もなかったので少しの間、沈黙が続いた。
そんな沈黙を、今度は美紅が破った。
「ねぇ、みるく・・・・・・」
「何？」
「キャットフードって・・・おいしいの？」
みるくは、「人間って愚かだな」と思いながら、鼻で笑った。
「食ってみるか？？」
「うん」
よし、早速行こうと美紅はみるくに乗せてもらうため、両手を伸ばした。
だが。
「何・・・その手。」
と、ことごとく無視されてしまった。
そして、たった五センチメートルにまで縮んでしまった美紅に対して、みるくのとどめの一言。
「ン・・・自分で歩けば？？」

人間の歩幅というのは、身長の約三分の一である。
では、五センチメートルの人間の歩幅はどうだろうか。
たった一メートルを歩くのに、最低でも八十歩は必要だ。
みるくの餌を置いているのが洗面所だから、今居るこのソファの上からは約四メートルはあるだろう。
その距離を「歩け」と・・・・・？
それでも、唯一の移動手段に拒否されてしまってはしょうがない。
美紅は意を決し、未知の味、キャットフードを目指し、歩き出した。
いや、歩き出そうとした。
「うわぁ！」

しかし、ココは言うまでもなくソファの上。
美紅は落ちそうになってだ。
高さにすればほんの五十センチメートル程。だが、五センチメートルの人間にとっては五階建てのビルの屋上に居るような感覚なのだろう。
ここから冷たい床の上に落ちたらどうなるかぐらい目に見えている。
「あーー！！！死、死、死、死、死、死いいいいいいー！！」
パニックに陥った美紅に、みるくは優雅にソファを飛び降りながら言った。
「バーカ」

「あー。死ぬかと思った・・・」
みるくの助けを借り、なんとかカーペットの上に降りることが出来た美紅。
「よし、行こう」
と、自分自身に言い聞かせ、歩き出したが、足が思うように動かない。
「なぜだろう」。そう思い、足下を見てみると。
「何コレっ！」
ふさふさしたものが、一面に広がっている。
そして、床はその遥か向こう。
「あ・・・・・。」
半ば放心状態にある美紅に、みるくはふさふさの上をゆっくりと歩きながら、
「バーカ。これはカーペットの毛。ココん家、冬からカーペット変えてないじゃん。あんたの母親が面倒くさがって。」
と言った。
「あ・・・・。そっか。」
戻って来た美紅は、ため息混じり声で言うとまた、ゆっくり歩き出

した。

クルッポー　クルッポー　クルッポー
壁にかけられた鳩時計が午前十時を指した頃。
「痛っ！」
美紅は今日五回目の台詞を口にした。
ようやくカーペット地獄から脱出した美紅を待ち受けていたのは『フローリングの溝』地獄。
最初の頃こそ、みるくはこける美紅を鼻で笑ったり、「バーカ」とか言ってたりしていたのだが、さすがに五回も続けばあきれて物も言えないと言ったところだろうか。
さて、未知の味「キャットフード」までの距離は残りわずか。
そして、美紅とキャットフードの間には、最後の難関「ドア」がある。
美紅の家のドアは横にスライドするタイプの物で、取っ手の部分をカチャッと音がするまで引きながら横にスライドすれば開く。
と、いうことは今の美紅でも、少しの隙間さえあれば力ずくで開けられる。
みるくも前足を隙間に突っ込めば開けることが出来る。
そして、ドアの奥の洗面所はいいかえれば「みるくの部屋」のような物で、みるくが出入り出来るように、どんなときでも数センチはドアが開いている。
はずなのだが。
今日はどういった心変わりか、ドアはしっかりと閉められ「虫一匹入れないかんね！」というオーラが漂っている。
「どうして！！！」
美紅は半泣き状態でドアをガンガン叩いた。
「キャットフードがぁぁぁぁぁ！！きゃとふーどがぁぁぁぁぁ！」
しかし、今の美紅では、どんなに力ずくで叩いても「コンコン」と

言う小さな音がなるだけ。
「食べるんだぁぁぁぁぁ！キャットフードぉぉぉぉぉぉ！」
尚も泣きわめく美紅に、みるくは平然とした声で言った。
「今朝、アンタの母親『面接、面接』とか言いながらスゲー急いで出てったから、そん時に開け忘れたんだろうな。」
すると美紅は、みるくの話を聞いていたのか聞いていないのか、今度は
「おがあざんのバガァぁぁぁぁぁぁぁ！」
と叫び始める。
「っさいな・・・」
というみるくの声は、空しくも美紅の叫びにかき消される。
みるくは「こんな時に手があったら・・・」と思うのだった。

三階から落ちても平気な、丈夫な体が欲しいよね。

さて、「耳」という物は大変すばらしく出来ている。
どんなにうるさくても、慣れてしまえばさほど気にならない。
みるくの耳も、美紅の叫びにようやく慣れ、うるさいと感じなくなった頃。
美紅の叫びがピタリと止んだ。
代わりに聞こえたのは歓喜の声。
「イー事思いつーいた！」
みるくは、なんだか嫌な予感がしたが、物は試しに聞いてみることにした。
「で、その『イー事』っていうのは、何？」
美紅はさんざん勿体ぶってから話し始めた。
「ん～。教えてほしい？聞いて驚きなさい！まずね、私があの手をかけるところー取手っていうのかなーの隙間に入るじゃない。で、そのまま取手のところをカチャッていうまで全力で押すわけ。そんで、みるくがドアを開けてくれれば、万事ＯＫ！」
「んー。よく分かんないが・・・・・ただ、その方法は確実に不可能だ。まず、アンタがどうやってあそこに乗る？」
みるくが前足でドアの手をかけるところを指した。
しかし、美紅は動じることなく不敵な笑みを口元に浮かべ、
「心配はご無用なのです！」
と言った。
「それはどういった意味で？」
みるくが聞くと美紅は両手を腰に当て胸を張って答えた。
「んっふふ～。ズバリ！みるくが頭の上に私を乗せて、ドアに寄りかかってもいいからとりあえず二本足で立ってくれればＯＫ。」
結局ウチなのか・・・。そう思いながらも、今断れば相当面倒なことになるだろうと思い、

「落ちても知らないから。」
とだけ言った。
すると、美紅はとたんに機嫌が良くなり、みるくに向かって
「さぁ。跪きなさい。」
と言う。
みるくは「あぁ。頭に乗せろってことね。」と解釈し、美紅に向かって頭を下げた。
そのことで、美紅はさらに調子に乗り、
「あーら。踏み台がないじゃないの。」
その言葉に、みるくは　カチン　ときた。
美紅はそんなことも知らず、みるくの頭に足をかける。
その瞬間
「ていっ！」
というかけ声とともに、みるくは頭を振り上げた。
勿論、上に乗っている美紅は吹っ飛ばされ、宙を舞う。
「はわっ！」
そして、グシャッと卵の潰れる音に似た、それでも「人間が落ちた」と分かるような音とともに、美紅が頭からフローリングに着地。
「いっつぅ・・・。あれ？でも私、死んでない？」
みるくに投げられたという事は、どう考えても最低５０ｃｍの高さから落下したということになる。
おそらく、先ほどのソファ事件と同じ５ｃｍの人間から見た三階建てのビルの屋上から地面に叩き付けられた気分なはず・・・なのだが。
目立った外傷は全くない。
というか、痣一つない。
「わぁかったぁ！体はちっちゃくても感覚はおっきいときのまんまなんだ！」
「なるほど・・・そーか・・・」と、勝手に自分の世界に浸っている美紅を、みるくは「キャットフード」の一言で現実へと引き戻す。

「と、まぁなにはともあれ最優先はキャットフード。行くわよぉ！作戦開始！」
美紅は叫ぶと勢いよくみるくの頭に飛び乗った。
それを確認したみるくは、
「いくよ」
の一言を発し、一度姿勢を低くすると前足を強く蹴った。
そのまま、前足をドアにかけ、後ろ足でぐーっと背伸びをする。
その姿勢のまま
「届くか？」
と、頭上の美紅に向かって聞く。
「んに・・・あと・・・ちょっと。」
その答えを聞いたみるくは、今度は美紅を自分の鼻先に移動させ、ぐいっと首を反らす。
美紅もその上で背伸びをする。
「後２ｍｍ・・・１ｍｍっと・・・届いたぁ！」
「いいから・・・はやく・・・のぼれ」
みるくは苦しそうな声でいった。
「あ、おｋおｋ。」
一方の美紅は気楽・・・というよりも楽しそうに、とって登りを始める。
実は美紅。小学校の頃から趣味でロッククライミングをやっていて、腕力には自信があった。
そして今、この状態で変わっているのは身長と体重のみ。
本来の１／３４にもなった体重を、本来と変わらない腕力で支える事が苦である訳が無い。
「うっりゃぁ！」
の一声で楽々とってのすきまに入る事が出来た美紅にみるくは、
「何か言う言葉は？」
と、不機嫌そうな声で言った。
その言葉を、美紅はあっさり切り捨てる。

「まだ作戦の途中よ。お礼は作戦が成功してから。」
みるくは「あの姿勢めっちゃきつかったんだけどな・・・」とかぶつぶつ言いながらも「わかったよ」という視線を美紅に送る。
その視線を受け取った美紅。
「じゃいくよー」
ハンドボール投げ３９ｍの腕力がとって部分を押す。
カチャッと小さい音がして、ロックが外れる。
「みぃるぅくぅ！」
「わーってる」
みるくが「カチャッ」の勢いで出来た隙間に爪を突っ込んで無理矢理あける。
次に前足、頭、胴と突っ込んでいき最後に後ろ足でドアを蹴り飛ばすと、上から小さな拍手が起こった。
「やったね！作戦成功！ということで降ろしてくんない？」
美紅の言葉に、みるくは「はぁー」と大きなため息をついた。
「おまえ、バカだろ。」
「なによっ。さっきからバカバカって。」
反論する美紅を一切無視して、みるくは話を続ける。
「それとも記憶力が無いだけなのか？まぁ、どっちにせよ脳みそが足りないって事だからどっちでもいいけど。」
「んむぅ。だから何なのよ。」
みるくは少し溜めて、言った。
「おまえさ、さっき自分で『感覚は大っきい時のまんまなんだ』とか言ってなかったか？」
「・・・そういえば。」

猫の味覚と人間の味覚って、一緒だったりするのかなぁ？

「むぅ。これが、キャットフードか・・・。」
とりあえずキャットフードにありつけた美紅。
「ほら。早く食ってみろよ。」
みるくが急かす。
「ちょっと待ってよ。初めて食べるモンって、緊張するんだから。」
美紅はみるくの皿からキャットフードを一つだけ掴み出した。というか抱え出した。
おそるおそる口元に近づける。
舌を出して、少しだけ舐めてみる。
「まぢっ」
「だろ？たまにはうまいもん出してくれよ。」
「うん、なんかごめん。」
しかし。
いくら不味くても、食べなければ美紅の空腹は満たされない。
なんとかキャットフード以外の物を探し出して口にしたい。
そう思い、家中を歩き回ったが見つかる訳も無く。
いつの間にか、壁にかけられた鳩時計が４時を示していた。
「あー最悪。お腹空いた。華湖ぉ。早く帰ってきてよぉ。」
願いも空しく、広い広いリビングルームの壁に吸い込まれていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6895j/

ミクロ少女

2010年10月12日00時43分発行